

No.23 March 1997

特集 宗教とフェミニズムは
両立するのか



Womanpower



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集 宗教とフェミニズムは両立するのか

教会を去る―事の顛末	木内佑子	1
十二月の例会でみえてきたこと	川橋範子	6
ユダヤ教と私	江口みりあむ	8
「従軍慰安婦」問題と仏教徒	池田恵理子	11
従えば無我か	山田恵子	16
差別が分かること	河本めぐみ	19
風通しの良いフェミニズム	千葉悦子	25

幼ママなんて大キライ(下)	岡村聡子	27
---------------	------	----

「日本万歳」史観を問うトーク集会

黙っているわけにはいかない	岩田澄江	32
戦後史を否定する「日本回帰」現象	奥田暁子	33
私たちが今向き合う相手とは?	小澤治慧	35
記号化する言葉と人心操作	鶴岡瑛	38

編集後記

表紙台字 松尾紀子／シンボルマークは「霊」を表す象形文字です。

特集

宗教とフェミニズムは両立するのか

教会を去る――事の顛末

木内 佑子

今、教会に行かない事がこんなに楽で、しかもホッとしている自分がいて、変なたとえだが、やっと離婚した妻の心境に似ているのではないかと思ったりする。

エネルギーを必要としない安堵感である。これまで何度か出入りをくり返して来た。教会の兄弟達（特に牧師夫妻）と良い交わりと関係を続けていきたいと願い、祈り、また教会を去ることは神さまの許しなしには出来ないと思っていたので、自分の感情を置き置き、礼拝、集会へと出席して来た。時には自分をなだめ、偽ってやって来た。が張っていた糸がプツンと切れたように、神さま無理です、行けません、と言ってしまったら、教会はここだけではないのだからとあたり前の事がストンと胸に落ちて収まった。・・・主日の礼

拝はどこでも出来るのだ、自分に合った、居心地の良い所で守っていいこうと思ったら、力が抜けて楽になった。「新しい事をする事や古い形を捨てることを恐れないで、神の為に大いなる事をなし、神から大いなる事を期待せよ。」と尊敬する宣教師の言葉がかたわらにあった。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」（ヘブル十二・二）。教会へ行って神様に目を上げず、人に目を向け、とらわれて苦しんでいた私自身の選択の誤りを知らされた。

十年近く前、洗礼を受けたばかりの幼い信仰者である私も含めて、牧師を招くかどうかの話し合いが持たれた。開拓伝道をして来たアメリカ人宣教師の帰国の為、日本人の牧師が近々牧会をするという事で、候補者の牧師が来て、メッセージがあった。その時私は、語られたメッセージから何も感じられなくて、正直にその事を話した。他の兄弟達も似たり寄ったりで、まだすこし帰国に時間があったので、時期尚早の感じがする、というのが大方の意見だった。けれども尊敬する先生達がこの人を推すのであれば、それに従いますと言ったと思う。残る私達はこの問題を真剣に祈りのうちに神さまに聴いただろうかと後に悔やむ事が、私にはあった。今になって思うと、見合いたした相手はど

うもピンとこないけれど、紹介してくれた仲人が信頼がおけるので決めた、という様なもので、結婚してみたら、二人の関係で仲人は関係ないのであった。

教会は牧師が来て同盟教団という組織に所属した。

信徒よりも牧師の立場が尊重される。私が最初にかけられた言葉は、「貴女がこの教会で一番古い方ですね。」

だった。「どういう意味だ？」と首をかしげた。私はその時洗礼を受けてまだ時間がそれ程たっていないくて、しかも女性問題の講座に出たりの目ざめの頃で、パウロの言葉に怒ったり、とまどったりしていて、疑問を投げかけたり、発言したりで、教会の中で浮くようなこともあった。週一回の聖書研究などではっきり「きょうは木内さんがいるからこの問題はやめましょう。」などと名指しされ、大いに傷ついて帰って来ることがあった。当時は返す言葉もなく、内にこもり悶々とした。教会の姉妹達と遅くまで牧師の事で話す事が多くなった。・・・そのうちひとり、ふたりとこなくなつた。けれども牧師は「去る者は追わず」なのか何の動きもとらなかつた。特に夫妻で来ていた熱心なクリスチャン二人がやめて他で礼拝の場（自分の家だったか）を決めた時はなんとかならないのかと思つたが、牧師は何の問題もないかのごとく見え、何か恐れ

ているのだろうかと思う程だった。

その頃私には子供を通して知り合つた十年來の友人がいた。彼女は二番目の子の育児ノイローゼにはじまるアルコール依存症で、時にまきこまれる私の悩みのひとつだった。けれども切り棄てることは出来ず、何故この人と、友達でいるのかと祈りのうちにあつて、示されたのは神様への先達という事だった。しばらくしてその友人が洗礼へと導かれ、礼拝の後、教会にとつても久し振りの喜びの洗礼式をむかえた。ところがたつた一人の洗礼者の名前を二度も牧師は呼び間違えた。洗礼式には珍しく、親類のおじさん、おばさんが来ていて、「失礼な事だ。」と怒られないかとドキドキした。その後何のフォローもなく、それこそ何もなにかのごとくだった。ひとごととして通り過ぎればよいものを、愚かにも直接牧師と話しをする事に打って出ってしまった。一対一で話し合つた。まずフォローするのがあなたの役目だと言われた、三時間余り、言葉を選び、けれども率直に、自分の気持ち、思うことを冷静に話したつもりだった。途中、「日本語が通じない。」と頭をかかえこんだ。家に帰りついて、玄関に倒れこんだ。全く体が動かなくなつて一週間は家事をすることが出来なくなつた。夏休みに入つたばかりで子供達の世話がまともに出来なかつた。可哀想な事で

あったが、ショックが大きすぎて子供のことへ思いが及ばなかった。その時カウンセラー養成の講義を受けていたのではじめて先生に自分のカウンセリングをしてもらい、徐々に立ち直ることが出来た。その後しばらく行かずにいたが、あちこち他の教会へも行ったが、ここダと思える程の生き生きした信仰者のいる教会には出会わなかった。

ところが翌年、高校受験を控えていた息子が突然洗礼を受けたいと言いだした。この時、息子をどこか他で洗礼をと思ったが、夫が、育ったところで彼の願いをかなえさせてやることだと言ひ、受験が終わった四月のイースターに息子は洗礼を受けた。このことで再度、引きもどされたのだと思ひ、またがんばって行き始めたのである。早朝の祈り会にも出席し、期待しつつ回復を願っていた。他の信者はほとんど来なかったから牧師夫妻と三人の祈り会であった。皮肉にもこの祈り会への出席が去る決心につながってしまった。入学後一年たって息子は不登校を起こし、はじめてのことでこの問題を主の前にさし出し、一緒に祈って欲しいと思つたが、三人で祈つていても私が祈るだけで、祈ってもらえないのである。・・・何故なのか、まるで無視されたようだった。また教会としても祈りの課題があつたが、お氣に入りと思われる人以外の名前を

祈りの中で聞くことがなかった（特に牧師夫人は）。時には怒りの顔で帰宅する。クリスチャンの夫はあきれ、つまづき以外の何ものにもならなかった。そうして言われたことは、「あなたの精神衛生上よくない、もう引き時だ」だった。返す言葉なくうつむくしかなかった。何故あの様な態度なのか、愚かにもまた、今度は夫人に聞いてみようと思つた。「失礼な事、何かしたのでしょうか・・・。」と。しばらくして実行した。「何もございません。」と答えが返つて来て話のつぎ穂がなかった。私の悩みに悩んだのはアホだったワケ・・・。「戦いすんで幕を閉じ」の心境になった。

同盟教団は福音派の教会だが宣教師夫妻のあと来た牧師は私にとっては一種のカルチャーショックであつた。それはかしこに見られるエリート意識なのか男意識なのか、プライドを傷つけないよう氣を使わせるといったもので、非常に疲れることがあつた。精神的な分断は、メッセージが頭の上を通り過ぎるのみで何の喜びも感動もなかった。霊をまことを持つて拝げる礼拝とは全く反対のものになつてしまつた。近くの教会の話など伝わって来ると、そう違つたものでなく、通つていた教会から近くの教会へと替わつて、前の教会の牧師に叱られた、などという話を聞いて情けなくないやになつた。これでも信仰者と呼べるのだろうか

――牧師に従っている信徒だけ認める様なせまさは、彼がこちらに依存しているに違はなく、こちらの出方次第で対応が違うのだった。縦の関係でいられる人とはスムーズにいく様だった。プロテスタントとはローマ法王を頂点とするカトリックに反抗（プロテスト）して出て来た流れのはずなのに、組織になれば全く同じ様に支配する面が出て来てしまう。

話し合いのあとのメッセージはこうだった。「人間同士ははリネズミの様なもので近づきすぎると傷つけ合う」というのである。この時間は私にとってはまさに針のムシロで、疲れ果てて帰って来た。「とにかくきょうは、礼拝には出られた。」と自分を納得させ忘れようとした。あとでカウンセリングの先生で牧会している知り合いの牧師にこの事を聞いたら、ひとりの信者にむかってよいテーマが見つかったとメッセージの中で話すのは大いなる誘惑ダと言っていた。メッセージで話されたらこちらはどうしようもない。その誘惑に負けたらしい。卑怯ではないか。「あれは私に向かつて語られた事ですか。」としばらく経って聞いたら「そんな事はありませんが」と言葉弱くなった。彼にとってとはとんだ信者なのだと思う。神に仕える牧師は仕えられる存在なのだろうか。偉くなりたいと思う者は仕える者になりなさいとみことばにあるのではない

いか・・・と心の内で批判し裁く私も罪深き人間であるけれど。

この前の冊子で子供の幼稚園でのママ達とのつき合いで悩み傷つき、入院までなされた岡村さんの事を知り、深く感じ入るものがあった。自分の立場を守ろうとする意識の根底にあるのはコンプレックスで（裏返すと非常に傲慢になる）そこをうかつにもついてもうと逆鱗にふれるという事になる。そんなに相手が守ろうとしているとは知らずにやってしまつて、何故あんなに怒るのだろうと慌ててしまう。不自由な立場を自分で納得させているのに、他人にそのことを気づかせられるという恐さと腹立たしさなのだろうと思う。決して無意識ではないのだ。私も知らずに存在がもたらす、うとましさ、ゆさぶりだったのかもしれない。始めのうちにはうまくいっていた牧師夫人にとつても、夫に文句を言う不屈きな信者に変わっていったのだろう。たまに行っても挨拶もされない事があった。私は彼女が私を見て起こす感情に責任があるのだろうか、と考えた。全く責任はないのである。「あなたの事で感情が害される。」と言われても「あなたの感情はあなたの責任」と返す事が出来れば、それこそ自立しているが、すまないやら、許してと言つてその人の気げんによつてこちらの精神状態が左右される程、ば

かな話はない。こちらが「こんな関係おことわり」と切ることができれば、ふさぎこみ、寝こんだりしないが、内にこもり、まるで反すうする精神構造は典型的な日本人気質ではないかと思う。今回のことで自分を「日本人」として意識したことが随分あった。もっとカラッとして良いはずなのに。そして大ていはそれが個人として攻撃されるのではなく、それこそ何人かで一人をターゲットにする「いじめ」になるのである。教会の相談会で「木内さんは困った人」と夫人が話していたと同調した人がワザワザ親切に話してくれた。当たらずとも遠からずではありますが・・と思った。

「信仰とフェミニズムは両立するか」という視点でキリスト者の立場から発言してくれないかと指名され面くらった。名簿の近況欄に牧師とうまくいかなくて、それを両立していけるかみたいになれとお引き受けした。恥を覚悟でたたき台になれとお引き受けしたが、問題意識の薄さと勉強不足で恥かしい限りだった。卑近な例でしか話が出来ず、短い発言のあとにはひたすら聞き役に徹してただかせた。実は会の発足まもない頃から参加していたが、洗礼を受けたばかりの信仰者にとっては、知的で理性の優った方の多い場所が、危険な所かもしれないと感じられ、例会にほとんど出席しない名ばかりの会員だった。しかし十年たつてみ

ると、教会も組織の中で権力は男性が握り、自分の判断や批判力を持つて事を見ようとする女は同性からみはざれることになるということを経験した。信仰の自立とは何なのかと考えさせられた。まず神とのパーソナルな関係があつて他の人との関係になつて行くはずなのに。ひとりの人間としてしっかり信仰に立ち、もっと勉強をして、自分の眼を通して歴史をとらえ、視点を拓げて差別をより明確に感じとれる者になりたと思う。ところで、かつて一緒に女性問題を考え、活動した仲間に「こんな題で」と言ったら、「まだフェミニズムなんて言葉使つてゐるの」とおどろかれた。死語になりつつあるのだろうか？フェミニズムがすべてではない。けれど神が最後に造られた女性が自らの性に自信を持つて、男性主導型の社会を変えていく気概を持つて戦つて行きたい。何より命をうみ出す性、命を重んじ、尊び、人に対する関心と理解する力は大きいと思う。会の中で新しい視点が開かれることを信じて。

十二月の例会で見えてきたこと

川 橋 範 子

十二月の例会で司会を努めたが、当日の感想をこの場を借りて述べたい。「信仰」と「フェミニズム」は両立するかという、私たちの会にとって非常に初源的な問いがテーマであったが、残念なことにこの問題について議論を深めることは殆どできなかった。これは司会の不手際によるところが大きく、当日の発表者のお二人には申し訳なく感じている。もともと「信仰」と「フェミニズム」という言葉そのものが問題を含んでいる。つまり「フェミニズム」も「信仰」もともに一枚岩のものであるはずがなく、もしも信仰とフェミニズムが両立するのであれば、それはどのような「フェミニズム」であり、どのような「信仰」であるのかをまず考えてみなければならぬだろう。その中でフェミニズムと両立する信仰をどのように再構築していくべきか、また信仰と共存できるフェミニズムをどう再創造していくべきなのかという議論を展開するべきであった。

私個人としては「信仰」という言葉そのものがすでにユダヤ・キリスト教的な含みをおびているように感じている。仏教の立場にたつものには「信心」のほうがなじみやすいかもしれない。しかし宗教ということばでなくあえて「信仰」を用いた点に、既存の制度化された宗教伝統の枠を越えてスピリチュアリティの問題を問い詰める目的があったといえる。

実は私にとって例会に（発表者としてではなく）参加するのは二年ぶりであった。約二年前この会では田川健三氏を招いた。その時の模様は *WOMAN SPIRIT* の一九九四年一七号に詳説されている。簡単に述べると田川氏の「フェミニスト」としての自己認識と、私たちの多くが当日の田川氏に対して感じた思いとの間に大変な隔たりがあったのである。田川氏の振る舞いは、この会メンバーの無知を啓蒙しようとするかのような高圧的なものであった。しかし自己を「フェミニスト」と認識する男性が、実は自分の「男性主義的姿勢」に無自覚で無批判なのは、それほど珍しいことではないのかもしれない。たとえば日本女性学研究会ニユースの *VOICE OF WOMEN* は、数回にわたって女性会員と男性会員との間の意識のズレを示す論争を掲載している。（*VOW* 一六二、一六四号参照）その中

で一人の女性が、男性会員の無遠慮で高飛車な態度に苛立ちと疲れを感じていと述べていた。彼女は女性を取り巻く状況が理不尽な男性権威主義的な発言に満ちていることを指摘して、その種の発言を「次から次へともぐらたたきのように潰していかなければならない女性のエネルギーの消費量」を男性会員は知るべきだと書いている。(VOW 一六四号九頁) 男性がフェミニズムから何かを学びたいと本当に思うのであれば、まずこのような女性の苛立ちと無力感に対してセンシティブになることが必要である。

私は今仏教界でジェンダー間の平等を取り戻す活動に携わっている。その運動で出会った男性のアクティビストの言動に疑問をもったことがある。「人権」というプロバガンダのもとに「女性を解放する」運動の旗手であるという思い込みが強すぎて、肝心の女性の主体性そのものを無視する態度がみられるのだ。つまり、「俺が用意した女性解放のプログラムに従ってこそ女は解放されるのになぜそれがわからないのか」という高みに立った姿勢である。同時に目につくのは自分のスタンスをリベラルにみせるための単なる「装置」としてのフェミニズム」に関心を示す男性たちである。この様な独善的な男性には結局女たちが抵抗の声をあげて、彼らが内面から変わってゆくことを期待するし

かないのだろうか。しかしそのために費やす私たちのエネルギーはあまりにも貴重である。

再び一二月の例会のテーマに立ち返ってみたい。フェミニズムを標榜する女性には、宗教を二義的に「家長制に支配された制度」とみなし、宗教に拠り所を求める女性を見下す態度をとる人もいる。しかしある女性が信仰や信心を持っているからといって即「家長制の協力者」であるかのように見做すのは偏見である。奥田さんが「フェミニズムと信仰の共存のために努力するフェミニスト神学の女性たちに勇気づけられた」という旨を述べておられた。日本のフェミニズム史において私たちの会の存在は貴重である。宗教の中の性差別構造を問いただしそれを是正するために努力していくことは不可欠であるが、それと同時に私たちは「バスタブの水と一緒に赤ん坊を捨てることなく」、私たち自身のスピリチュアリティをも大切にしていきたい。そのためにもこの会が民主的な討議の場になることを望む。

ユダヤ教と私

江 口 みりあむ

私はユダヤ人として生まれた。ユダヤ人として生まれることは、ユダヤ人の母親から生まれるということの意味する。父親がユダヤ人であっても、母親がそうでなければ、正式な改宗手続きをふまないとユダヤ人として認められない。

だからといって、ユダヤ人社会は母系的だとか母権的だというわけではない。むしろその逆である。ただ、イスラエルの地理的位置を見ても想像がつくと思うが、昔は様々な国の軍隊の通り道になっていたことなどから、強姦による出産の多発が問題になり、その子供たちが社会的にユダヤ人として受け入れられるために、「ユダヤ性」を父親ではなく母親によって決めることになったらしい。

右にもふれたように、ユダヤ人社会へは二つの別々の入り口、つまり血縁と改宗手続きとがある。後者の場合、条件や儀式はユダヤ教の中の宗派によって異なるが、ユダヤの民の歴史や宗教的内容に関する十分な

知識を身に付けることが共通の条件である。一方、ユダヤ人として生まれたら、歴史や宗教について無知であつても、またユダヤ教という宗教を受け入れていなくても、そのことはユダヤ人社会の一員としてのアイデンティティーに差し支えない。

ユダヤ人の中では、なんらかの形でユダヤ教的な宗教生活を行っている人のほうが多いであろうが、全然行っていない人も少なくない。また、多くの日本人が、宗教的意識が特にないのには習慣として仏教のお葬式や法事を行ったり、神社を通れば何となく合掌するように、一応ユダヤ教の最低限の「宗教的動作」を行う家庭も多い。私はそのような家庭で育った。

私の両親は、宗教的意識がほとんどなかったといっても過言ではない。しかし圧倒的にユダヤ人の多い地区に住み、ユダヤ人としてのアイデンティティーはカナダ人としてのアイデンティティーより強かった。家庭ではお祭りの食事ぐらいしか宗教に関係することをしなかったにも関わらず、私たち子どもを「土曜学校」(キリスト教の日曜学校のようなもの)に通わせた。そのおかげで私は聖書の物語・ユダヤの民の歴史・ユダヤ教の様々な行事などがある程度知ることができた。弟たちは、普通の学校の放課後、他のほとんどの男子たちと一緒にヘブライ語や祈り方を学ぶ教室にも

通ったが、女子には不要だという考え方から私はそういう勉強をさせられなかった。男子たちがその勉強を面倒くさがっていたので、私たち女子は、これを差別とは見なさず、自分が楽に済んだのだと思っていた。

私の子供時代のことを考えてみれば、学校の先生以外、周囲の人々はほとんど皆ユダヤ人だった。両親や祖父母のように差別を受けることもなかった。そのせいか、ユダヤ人としてのアイデンティティーは、日本に住む日本人のアイデンティティーのように、当たり前で、深く考えることもなかった。そして、私は二〇歳のときにすてきな日本男性と恋愛し、両親の反対をあまり問題にせず、二年後さっさと結婚した。

結婚後は、京都に住むことになり、当然のことだが周囲にはユダヤ人が一人もいない。始めのころはそんなことを気にする余裕もなく、仕事や出産や育児に追われていた。しかし、学生であった夫がやっと就職し、二人目の子供が生まれたころ、私はアイデンティティー喪失の危機に陥った。このときを機に、毎週金曜日の夕食を北米式のユダヤ風に変え、ろうそくをともし、伝統的な安息日前夜の行事を自己流で行うようになった。そして、京都に暮らしていたユダヤ人を数人見つけ、年に何回かお祭りの食事を一緒にするようになった。

そこまではよかったのだが、神戸にユダヤ教会があると聞いて、はるばる京都から子連れで大切な新年礼拝に出席するために出向いたとき、本当に驚いた。女性はまだで檻の中にいるかのような席に座らされ、半透明の幕の後ろから礼拝に「参加」する形式がとられていたのだ。女性席からかなり離れた聖書台は礼拝堂の中心にあり、その前に、一部の男性がずっと立って祈りを先導している。これを取りまくように坐っている男性も次々とそこへ寄ったり去ったりするが、女性には終始幕の後ろのまま。

これは、伝統的な礼拝のしかたであり、現在では正統派の教会でしか行われていない。なぜ関西の唯一のユダヤ教会でこんなことをするのかと聞いたら、改革派の人などはどんな礼拝にでも参加できるが、正統派の人はこういう形式でないと、参加できないからだ」と説明された。

本来、礼拝は主に男性のためであり、女性が目の前にいると集中できなくなるので、女性を幕の後ろに隠すという習慣が生まれたようである。礼拝はなぜ主に男性のためであるのか。それは、伝統的な律法解釈によつて、礼拝に出て祈りすることが男性に対して義務づけられており、女性は子育てなどで忙しいため礼拝を免じられているからである。律法の伝統的解釈は、

このような差別に溢れている。

私が子供時代に通った土曜学校は改革派の教会で行われ、たまに参加した礼拝も改革派風の、まあまあ楽しいものだったので、こんな考え方に出会うのは始めて。

一九九〇年私たちは京都から神戸に引っ越した。せっかく近くなった教会へは、行ってもあまり参加した気分にならないので、年に二、三回しか行かない。それも、新年などの大切なとき、京都から来る友達の顔を見に行くために、である。他の女性も同じ気持ちで、時々顔を出す程度。子供たちは、退屈だから、行くのを拒否している。

正統派でも、欧米やオーストラリアなどでは、フェミニズムの影響によって様々な変化が起こっているというニュースをよく聞く。しかし、神戸の教会で権力を握っている男性たちの考えでは、イスラエルなどから超正統派の人々（イスラエルでもごく少数である）

が日本を訪れたとき、安心して神戸の教会で祈りができるようにするために、つまりどんなに保守的なユダヤ人でも利用できる教会として保つためには、今のやり方は永遠に変えられないとのこと。

私はコミュニティーの中での宗教生活はほとんど実現できないと諦めた。自分の「ユダヤ性」を充実させ

るためのこれに代わる方法として、一九七〇年代の後半からユダヤ教的思想を勉強し始めた。長女と次女が幼稚園に入ったころ、大学院に入り、宗教学を専攻し、自分にぴったりのユダヤ人思想家を発見した。それはマーティン・ブーバーであった。二〇世紀の前半に活躍した男性であるが、多くのユダヤ教やキリスト教のフェミニストに影響を及ぼしたほど、フェミニスト神学の根拠となり得る思想を世に告げた人物である。本人は特にフェミニズムの立場に立っていたわけではない。性別とは関係なく、すべての存在者との真の関わりあいを中心にした生活や、その延長として、「なんじ」としかよばない神との生きた関係を様々な角度から説いた。彼によると、これは真のユダヤ精神であり、ユダヤ教の、世界へのメッセージである。ブーバーの研究から、私は次第にフェミニスト神学などの研究へと進み、日本の宗教的フェミニズムにも関心をもつようになった。

最近、ユダヤ教のフェミニズムについての論文を書くために、色々な資料を手に入れた。それを読むと、この数年、学問の世界でも、宗団生活の面でも、ユダヤ教のフェミニズムが飛躍的に成果をあげているということがわかった。

日本、とくに関西に住む限り、そんな動きに参加で

きないことを残念に思っている。確かに、呼掛ける人がいたら、女や子供も有意義に楽しく参加できる集会などが関西でも実現できるかもしれない。しかし、教会のスペースは、権力者の男性たちによって定められた行事にしか使えないし、関西の数少ないユダヤ人は互いに遠く離れているし、その大部分は短期滞在の人々である。よほどの思い入れと時間の余裕がなければ、呼掛け人にはなれないと思う。実は、三年ほど前、数人の短期滞在の男女が教会とは別に、差別のない集会を開こうとしたこともある。「関西のユダヤ人を分裂させようとしている」と主張する教会の男性たちに苛められ、結局失敗に終わった。

それでも私は、ある意味で、ユダヤ教的信仰生活とフェミニズムを両立させていると思う。それができるようにになったのは、ブーバーのユダヤ教解釈や、フェミニスト神学のおかげである。コミュニティとしての宗教生活はほとんど味わえない。でも、心のなかの信仰生活と、家庭での簡単な行事と、そして勉強によって、自分のアイデンティティーを何とか養っている。

「従軍慰安婦」問題と仏教徒

池田恵理子

韓国の「ナヌムの家」の僧侶が日本の仏教徒と「慰安婦」問題で連帯したいと考えているので、日本各地に交流の場を設けて欲しい——こんな依頼が届いたのは去年の十一月のことだった。私は二年前から何度か「従軍慰安婦」の番組を作ってきたが、かつて日本軍に「慰安婦」にされた女性たちが共同生活を営む「ナヌムの家」にはそのつど世話になってきた。「ナヌムの家」は一九九二年に韓国仏教界のカンパをもとにソウル市内に作られ、ドキュメンタリー映画にもなり、マスメディアにもよく登場するので、韓国の「慰安婦」のシンボリック存在になっている。曹溪宗の若い僧侶・ヘジン（慧真）さんはこの家の館長で、ハルモニたちに慕われ頼りにされていた。ヘジンさんの依頼なら一言返事で「まかせなさい！」と言いたいところである。だが私は仏教関係の人をほとんど知らなかった。九州では福岡で「慰安婦」問題に取り組んできた森川万智子さんに呼びかけを頼むので、それ以外の地域をあたってほしい、と言う。これは困ったことになった、と思

った。

それでも結局引き受けることになって、半月の間、仕事の合間に各地の仏教関係者に接触し、少しでも脈がありそうな人やグループを訪ね、電話とFAXの攻勢をかけることになった。ヘジンさんの期待にどれほど答えられたかわからないが、各地での交流は実現した。ヘジンさんは十二月一日から一〇日までの間に、福岡、京都、三重、金沢、東京でさまざまな宗派の仏教関係者との集まりをもった。これらの集会のもようは地域ごとの特色もあって、なかなか興味深い。しかし紙面の制約もあるので、ここでは「慰安婦」問題と仏教徒について、各地に呼びかけをしながら私が感じたことだけを書いてみたい。

◆ 日本人の性意識と仏教

アテもないのに引き受けた理由の一つは、「慰安婦」問題を取材していて、この制度を作り出した日本の性風土に仏教がどう関わっているのか、について関心があつたからだつた。取材で出会う元日本兵の多くは「慰安婦には気の毒だが、売られてきた女たちだからしかたがなかった」と言い、加害者意識に苦しむことがない。彼らは戦友たちの受難と死を語る時には涙を浮かべ、遺骨収集や慰霊の旅にも熱心だが、僧侶を従えて

旧戦地での慰霊祭を催しながら、慰霊塔のすぐ隣の寺院で起こした集団強姦を思い出すことも、部隊にいた「慰安婦」の末期を悼むこともないらしい。こうした風潮は元日本兵だけでなく、「慰安婦は売春婦だった。国家による戦争犯罪ではない」「戦場強姦はこの国にもあつた」として、教科書から「慰安婦」記述の削除を求めている戦後生まれの学者や文化人たちにも共通している。それに同調している女性たちも例外ではない。この罪責感の欠如は、単なる無知や情報不足、政治イデオロギーのせいだけだろうか。

私は性に関わる番組を作る中で、「従軍慰安婦」制度は現在の売買春やポルノ文化の興隆、セクシュアル・ハラスメント、根強い強姦神話などと地続きの、日本の性風土が生み出したものだと考えてようになってきた。「慰安婦」問題は戦争責任や民族差別の問題であると同時に、女性への性差別、性暴力の問題である。性風土の形成には宗教が深く関わっている。女人五障や変成男子の思想を持つ仏教は、日本人の性意識にどのような影響を与えてきたのか。こうした検証は女性の仏教研究者によって始められているが、現在の仏教界ではそれがどう受け止められているのだろうか。知りたいことはたくさんあつた。

◆ 仏教徒の関心は高かった

こんな〈下心〉をもって取り組んだネットワーク作りで、まず私が驚いたのは仏教関係者の手ごたえの良さだった。わずかなツテを頼って電話をかけると、ほとんどの人が今回の目的に賛同してくれた。地域の仏教徒や市民への呼びかけピラを作ったり、集会場所を探したり通訳の手配を始める人などが出てきた。「慰安婦」番組を作ってきた私の悩みは、この問題が現在の日本人にとって極めて重要な課題なのに、広範な市民の関心事にならないことだった。それなのに、どうだろう。この感度のいい反応は！

後で振り返れば私が知っていたわずかな仏教徒が、豊かな人脈をもつ人々だったからなのだが、現代はへ感度のいい人たちが固まっているので、その一端にアクセスすると芋づる式に人脈が開けてくる。真っ先に相談したのは関西で「慰安婦」問題に取り組んできたフェミニストの研究者で、仏教と性差別をテーマにしている源淳子さんだった。「この人なら動いてくれるかもしれない」という人たちの名前が何人も出てきた。いずれも人権問題や宗教内の女性差別、仏教徒の戦争責任、宗教と天皇制などに取り組んでいる仏教徒である。そこから次々に人の輪が広がっていった。関西では源さんと大阪の戸次公正さんが仏教関係者に声

をかけて、人権活動家の徐勝さんの家で集まりがもたれた。

あちこちあたっていううちに、エイズの取材で出会って以来の友人が金沢にすることを思い出した。今井由三代さんはお寺を「おーぶんでんぶる」として地域に開放し、教育問題からエイズ、反原発など様々な活動を行っている。電話をすると丁度、映画「ナヌムの家」の上映会直前で、その実行委員もしているという。「おお、渡りに船！」である。こうして金沢の集会は今井さんの寺で開かれ、朝鮮半島からの強制連行の裁判を支援している富山の僧侶たちも加わることになった。

友人の紹介で、三重で仏教界の女性差別に長年取り組んできた尾畑潤子さんを知った。連絡をとるとおつれあいの住職が去年「ナヌムの家」を訪問しており、ヘジンさんから手紙もきていることがわかった。三重の集まりには「慰安婦」問題で活動してきた中京地区のNGOも参加している。福岡では森川さんが「戦後責任を問う関釜裁判を支援する会」の人々や仏教関係者に声をかけて、準備が整っていた。

苦戦したのは東京だった。多くの仏教徒が様々な活動をしているのだが、それぞれが点在している。ようやく二年前に元「慰安婦」の証言集会を開いたことの

ある住職・前田義朗さんに出会い、中野優子さんが曹洞宗の尼僧さんたちに呼びかけてくれて、十二月八日に集会をもつことができた。二〇人ほどが新宿の専行寺に集まり、ヘジンを囲んだ。私にとっては、ヘジンさん以外の人はずべてが初対面だった。

◆「慰安婦」問題でなにを語るか

各地の集会がスムーズに成立したのは、「慰安婦」問題自体を消し去ろうとするキナ臭い動きに対して、多くの人が漠然とした危機感を持ち始めたからではなかったか、と思う。自民党の「明るい日本・議員連盟」などと連動するように、「新しい歴史教科書を作る会」がマスメディアでキャンペーンを始めていた。その後の動きから彼らは「慰安婦」だけでなく、人権や平等、反差別、福祉など戦後、私たちの社会がまがりなりにも獲得しようとしてきたものを否定していることが明らかになってきた。このようなバックラッシュは、今まで「慰安婦」問題に関わりを持たなかった人を、「何とかしないと、とんでもないことになる」という気持ちにさせたのではなからうか。

「慰安婦」問題に関心を持った仏教徒が、韓国の仏教徒を通して「ナヌムの家」とつながりができたことはすばらしいと思う。ヘジンさんを囲んだ福岡のお寺

ではこの夏、ヘジンさんと元「慰安婦」の女性を招待する企画を進めている。金沢では「ナヌムの家」への訪問希望の声がある。十二月末、「慰安婦」削除の動きに対して全国の女性たちが抗議の声をあげ、わずかな日数で千人近くの賛同が寄せられ、緊急アピールが出されたが、そこには女性の仏教者も加わっていた。

しかし私が知リたかったこと―「慰安婦」制度を作りあげた日本の性風土と仏教徒の関係を仏教徒がどう考えているのかについては、残念ながら話し合う機会がなかった。このようなテーマが話題にのぼることはなかったし、集会では今後の現実的な課題に仏教徒がどう関わっていくかの議論で手いっぱいだった。

東京の集会では一時間ほどヘジンさんの話を聞き、残りの一時間を質疑にあてた。男性の仏教徒の多くが、ヘジンさんに「慰安婦」問題を解決するための政治的な行動目標を求める質問をした。日本政府が進めている「国民基金」とは違う償いの方法はないのか、計画されている「慰安婦」の歴史資料館とはどのようなのか、などである。ヘンジさんは具体的な協力要請というよりも、日本の仏教徒がこの問題に関わって前面に出てきて欲しい、そのために韓国の被害者の状況を知って欲しいと考えているようだった。日本側の参加者の様子を見ると、そこが今一つ、もの足らな

ったのかもしれないと思った。

◆ 問われる日本の性風土

「従軍慰安婦」問題は、獲得すべき運動目標に向かつてまっしぐらに進めば解決して一件落着、という類の問題ではない。もちろん日本政府による被害者への個人補償と謝罪の実現が当面の課題だが、真相究明や再発防止、歴史教育のためにも、女性への性差別、性暴力をどうなくしていくかという大きな問題がある。

それは日本の文化や宗教そのものを問いなおす取り組みになるが、その時には一人一人が自らの性意識・性行動まで相対化しなければならなくなる。これは性差別や性暴力に鈍感な日本社会では厳しい問題だ。

仏教界でも女性仏教徒による取り組みは始められていたが、男性仏教徒はどうなのだろうか。私の経験では良心的で正義派の男性でも、こと性の問題になると多くは怯む。自分の性意識は天然自然のものと思っているし、それを相対化しようと思わない。男性は女性より、性差別や性暴力の問題に直面する機会が少ないからだろう。ある雑誌の投稿欄に「慰安婦」には国家が補償すべきだと主張する男性（三八歳 教員）が「厳然たる戦争犯罪であるこの問題を、性暴力に矮小化するな」と書いているのを読んで茫然とした。この人は

現在、この様な性意識そのものが問われていることに、気づいていないのである。

しかし今回の作業で何人もの女性仏教徒に出会い、彼女たちの中に仏教と性差別の問題に取り組んでいく意気込みを感じたのは嬉しかった。また「慰安婦」問題を仏教者に課せられた課題の一つだ、と認識している人たちがいるのも心強かった。伝統が支配的な宗教界で仏教思想の根底を問うことは難しく、現実の軋轢も多いことだろう。だが日本人の心象に深く入り込み、内面化されている仏教と性意識そのものを問う試みは、ぜひ宗派を越えてなされてほしい。そうすることが最終的には、今も苦しんでいる被害者への支援につながるのだと思う。そこから加害意識を持つことがなく戦後を生きてきた元兵士たちとの対話の糸口がみつかるかもしれない。また爛熟をきわめながらも恐ろしく貧困な現代日本の状況を変えていくことも、こうした積み上げなしにはありえないだろう。

二月半ば、大阪の在日女性が「ナヌムの家通信」を日本語に翻訳して送ってくれたので、仏教ネットワークの人々に送ることにした。「ナヌムの家」は韓国の新聞社と提携してインターネットを始めている。東京で呼びかけを行った中野優子さんも、つい先日「女性と仏教」というホームページ（*）を開いた。ここに

は東京の集会でのヘジンさんの話と質疑応答の記録も載っている。この春には源淳子さんや大越愛子さんたちが「女性・戦争・人権」学会を新たに立ち上げるという。

二月二日、「ナナムの家」の中心にいたカン・ドツキョン（姜徳景）さんが六七歳で亡くなった。彼女は世界に誇るべきサバイバーの一人だった。「ナナムの家」に残された人々の悲しみを思うと辛い。私たちにあまり時間がないことも確かだ。だが同じ志を持って彼女たちを支える人々の国境を越えた連帯は、新たな地平を開いていくものと思う。私自身は仏教徒たちの周辺で〈応援団〉をするくらいのことしかできないが、「慰安婦」問題に関わる仏教徒の今後の試作と活動に期待したい。

* HOME PAGE: <http://www.fsinet.or.jp/yuko>

Email: y-nakano@fsinet.or.jp

従えば無我か

山田 恵子

私が二十歳のときに洗礼を受けた教会は、アメリカ人宣教師が創設した小さなプロテスタントの教団の中の、今にして思えば新しく、若々しく、伝統や因習に捉われない教会だった。伝道に伝道を重ねて開拓した小さな教会で、礼拝は最初の頃は牧師夫妻を入れて五、六人という小さな集会だったので、男女の別を云々している余裕はなかった。一九六〇年代の小さな田舎町で教会という異文化空間に興味を持っていたのぞきにくるのはほとんどが女子高生だった。教団は小さいながらも多くの宣教師、伝道師を世に送り出し、海外にまで派遣している。私の属していた母教会からも何人かの伝道師を輩出し、その多くが女性だった。

やがて私はあまりにも禁欲的で、あれもダメこれもダメの教会生活に窒息しそうになって教会を去るが、もしあのままずっと教会に通っていたとしても、この教会で女性差別を感じることはなかっただろう。少なくとも結婚するまでは。

その後通った別の教会はより保守的だった。ある教

会の牧師の連れ合いは牧師を「主人」と呼んでいたし（キリスト者にとって主人とはキリストのことではなかったか）もう一つの教会では信徒の活動を独身男性の「青年会」と女性の「白ゆり会」とに分け、男女の交流を極力避けていた。戦前ではあるまいに。

結婚前にも世間に女性差別はあった。会社では女性にだけ洗面所を含む掃除があったし、お茶当番があったし（今でもある）、大部分の女性が補助職だった。それでも当時はそういうものだと思っていた。しかし真の女性差別は結婚制度の中にこそあった。

まず、民法上は存在しないと学校で教えられてきた家制度があった。私は結婚して知らぬ間に夫のイエの一員となっていた。そして夫のイエの男の跡継ぎを生むことを期待され、夫の両親を看ることを期待された。一方私の実家は娘二人しかいないので、私の両親は自分たちだけで老いを始末しなければならなかった。まるで、娘しか生まなかつた私の両親の非であるかのようにだった。

専業主婦であつた十年間に、私は家制度に鍛えられてフェミニストになった。自分だけならまだしも、私の両親や、娘までが家制度のために差別されるのは断じて許せないと思つた。私にとってフェミニズムとは「あなたにとって理不尽なことを私に強制しないで」

というごく当たり前の主張にすぎない。

ところでフェミニズムと宗教（信仰）は両立するのだろうか。十五年前思いがけなく禅に出会って以来、私にとって禅は人生の目的となつた。それは同時にフェミニストにはジレンマでもあつた。道元禅師は言われる「仏道をならふというは、自己をならふなり、自己をならふというは、自己を忘るるなり」と。禅を学ぶとは自己を得るために自己を忘れることである。そのためには「無常を觀ずるか、法相をあきらめるか、正師につくか、の三つが大切だ」と説かれた。

禅を志す者にとって正師は欠くことが出来ない指導者である。禅を学ぶとは書道や武道のような単なる道を習うこととは意味合いが異なる。人生の一大事である。しかし悲しいことにこの十五年間、私は在家の方の主催する会や曹洞宗、臨済宗の座禅会の会員となつて参禅してきたが、正師と仰げる方に出会っていない。この師に就いて人生の一大事を学びたいという思いに駆られたことがないのだ。

カトリックの井上洋治神父は言われる「何も型に入らないで自分で歩き廻っているとどこまで歩いても「私」というのがくつついて歩いてくる。机の前に座つて、どんなに学んでも自分が主である世界を脱却することはできません」この言葉は真実であろう。しか

し井上神父の言われる「あちら様が主になって自分が従になる世界」を実践している仏教者が今の既成教団にどれほどいるだろうか。

例えば私が短期間会員だった曹洞宗の或るお寺の座禅会では、ちょうど昭和天皇の亡くなられた日に新年の座禅会があったのだが、全員で黙禱を捧げることになった。その後全員が一言ずつ発言の機会があったので「天皇の戦争責任を考えると、東南アジアの人たちの気持ちを考えると、会員として黙禱を捧げることには疑問を感じます。」と発言した。その後、お寺の機関誌に「昭和天皇こそは日本を破滅の淵から救われた救世主」との記載があったので、私は自分のいるべき場所が間違っていることに気が付いてすぐに会を辞めた。

またこのお寺の主催の講演会で講師に招かれた曹洞宗の青山俊薫老師は「人間にはいても知らなくてはない人、いてもいなくてもいい人、いない方がいい人、の三種類があります。心していない方がいい人とならないように」との趣旨の発言をしている。老師はこの三種類の人間の区別を決めていると考えているのだろうか。彼女だろうか、彼女の目は神の目になったのだろうか。私には神あるいは絶対者の目には、すべての人間が存在すべくして存在しているとしたか思

えない。

私の友達の一人にかつて曹洞宗の宗務所でアルバイトをしていたという人がいる。彼女の話は教団の僧侶がいかに金と欲にまみれているかを物語って部外者の私には面白くて仕方ないのだが、自分を仏教者と考えると耳を覆いたくなるような内容だった。また江ノ島で見学した大きなお寺の機関誌には「宗教法人法が改悪されると、駐車場経営も出来なくなります。」とあって、それを読んだある人は「誰もするなといってるわけじゃないんだ、税金を払えといってるだけなんだ」と笑ったが、このような非常識な、あまりにも幼稚な人達が仏教界では指導者として仰がれているのである。私がキリスト教の洗礼を受けたとき母教会の伊藤牧師は「軽信、盲信、狂信」を戒められた。その言葉は私の心に深く刻まれて、それ以来伝統宗教以外には近付かないことが私の信条になっている。実際、当時出席していたある教会に、統一教会から逃れてきた人が礼拝に出ていたが、彼女はマインドコントロールが解けずその後自殺してしまった、という事件もあった。宗教は命の根源に関わることで、私はある種の思想研究会のような集会にも近付かない。そして伝統仏教はこの有様である。

一時期一人で座禅していたこともあった。それも「師

に就かないと危ないですよ」という人の勧めでやめた。実際に不思議な体験が何度かあったのだ。いろいろな人も訪ねた。何の手応えもなかった。わがままなのだろうか。自分を捨てて盲目的に従えば「あちら様が主」の世界を知ることが出来るのだろうか。何に對して、誰に對して従えばいいのだろうか。

私は今、かつて通っていた母教会の伊藤牧師をなつかしく思い出す。伊藤師は人間として教師として立派な方だった。一字一句の聖書の言葉を信じ、伝道師になってから、伝道師と信徒との結婚が禁じられていた教団で、信徒であった奥様との恋愛結婚を果たし、今もなおキリスト教の伝道にその生涯を捧げていられる。教会を離れてから何度か伺ったが、会うたびに暖かい人柄に年輪を重ねられて、キリストを映す鏡の一つとならている。そしていつか再び伊藤師にお会いしたとき、私は師に負けない喜びをもって、自分の歩いてきた道を語る仏教者となっていられるであろうか。これが今の私の願いである。

差別が分かること

河本 めぐみ

さまざまな「差別の問題」を、情報や知識として学ぶことと、実際に目の前で起こった「差別の事実」を見抜ける感性を持つこととは別の次元のことである。たとえ私たちが熱心に基本的な知識を仕入れたとしても、その延長上に果たして「複雑にこじれた差別問題」に関わっていく決断力を持てるのかという疑問点はしつかり認識しておく必要がある。頭で差別が分かっただけになり、身近にある具体的な差別に對して責任ある行動を取れることとのギャップは大きい。その深い谷間を飛び越せる勇氣を持てるかどうかは、その人の感性と決断の問題となる。現実の問いを避けた「安全な場所」で積み重ねられた観念的な知識は、差別されている人を助けるどころか差別を放置・拡大する働きをしてしまう場合さえある。

私は今、具体的な「女性差別」の問題に直面させられている。しかし自分自身がより深く問われた機会として、また、差別の根強さ、複雑さ、不条理といったものをとことん味わわされた体験として、これは感謝

をすべきことであるかもしれない。

それは、私が通う神学校で起こった事柄である。細かな状況をここで語ることはできないが、個人的なことで、具体的な場所ので起こったことの中にある普遍性を目をとめ、そこに現れている問題のうち、ここでは特に女性たちの関わりに焦点をあてて考えてみたい。

一人の女子学生（私）が、聖書の授業で従来の男性中心の解釈には合わない意見を言った。また、「女性神学」について学ぶ授業で、女性が抑圧されている現状を自分の体験から語った（彼女は、フェミニズムに理解を示す立場を打ち出している教師の授業であるという信頼感から、そのテーマに添って、ある程度自分の率直な意見を述べていたのだ）。ところが、その両方の授業の担当者であった男性教師がそれらの内容に反感を覚え、その女子学生を授業以外の場所において、一方的に断罪・排斥する態度に出たのだ。その時に男性教師の語った内容は、かなりの部分誤解や偏見に基づいた根拠の曖昧なものであったうえ、その女子学生の人間性をまで否定するようなあまりにひどいものであり、更にその女子学生を、新開講の「性差別問題の講座」の準備委員に相応しくない（女性の問題をしゃべりすぎる、「父なる神」の呼び方への疑義を語る）として排除するものであった。この事件とその前後の

経過のひとつ一つが、その女子学生に深い傷を負わせた。

ここで更に起こったことは、性差別の問題を提起する女性を嫌う他の女子学生が、この男性教師に歩調を合わせようとしたことであった。そしてその後もさまざまな差別が繰り返されていくこととなった。女性の敵対者は女性だとはよく言われるが、もし女性差別の問題を自ら提起する女性がこの学校にせめてもう一人いたならば、事態の展開は全く違ったものになっていただろうと思う。キリスト教の長い歴史の中で、既成の秩序や意識に従わない女性は迫害を受け続けてきたが、この神学校においても、女性視点からの発言は異質なものであり、特定の女性の個人的なものにすぎないとして受け止められない状況がある。まだ共有できていないことをたった一人で言っていくのはしんどいことである。女性解放を口にする女性が、大抵の場所で何等かの冷遇を受け辛い思いを味わっていることは友人たちを見ていると分かる。しかし結局自分のいる場で、解放への希望を抱いて時間をかけて誠実に向き合っていくしかないのである。差別と闘うということとは、具体的な「場」に関わることでしかないのだ。

女性解放の視点を持つ女性を嫌うことで、一致団結してしまう女性たちの構図はよく見られることだが、

その実態は深刻である。心の中では家父長制の権威主義を憎み、その被害を受けて苦しんでいる女性の場合でも、そこから脱する勇氣を持てずに、逆に自立した女性を嫌悪して誹謗や中傷で徹底的におとしめようとする。それは言葉を変えれば家父長制への依存であった、結果的には権威主義の男性と利害が一致したりしてしまふ。つまり男性の言葉を借りて「生意気な」女性をバッシングするチャンスを得るのだ。しかし、そのことによって彼女は女性として感じている苦しみから解放されるわけではなく、むしろより深く傷つき、抑圧が深まっていくということが起きる。それは、父権制の「力の論理」に振り回された結果であり、そこに「人間解放（女も男も）の展望」（フェミニズム）はない。女性解放の大きな流れにおいて権利獲得云々の当然のプロセスを経てきたあとには、実にこのような内的な問題こそが最も重要なテーマであることを私は痛感する。女性も男性も含めて、それは、疎外され続けてきた存在の、魂の癒しの問題である。

男性社会の中にあつて、女性は自分を表現する言葉を持つことのできない辛さを味わい続けている。しかし、私自身は長い自分史の中で少しずつ変えられてきた。出会った多くの女性たちによって、「私自身の意志」を持つことは当然のことであると励まされてきた

のだ。そのために私は大分自分の意志を言えるようになった。ところが、少し言えるようになればこんどは女性の反感に出会う。なぜ女性は分断されてしまうのか。ここには、抑圧された者同士が他を抑圧するという悲しさがある。誹謗・中傷を続けるその女性は、「敵」を必要としているのだ。ひとりの女性をスケープゴードにして排斥することで、問題の本質をごまかしている。その原因は、その排斥をする人の心の中にあるのである。自分自身の不安や恐怖を身近な者（男性をターゲットにすることはできないが、女性なら手の届く身近な者である・・・）に投影させて追放しようとする「あがき」だ。

苦しみの場に置かれた者は、本質を見抜けるようになる。それができないのはほんのちよつとの勇氣が足りないからだと思ふ（この「ほんのちよつと」がすごいものなのだが・・・）。女性差別は連帯があつてこそ闘えるのに、この神学校ではまだ女性の真の連帯は起こっていない。この学校において、そのような伝統がつくられて来なかった。解放への期待よりも不安が大きい時に、目の前の問題に関与していく勇氣を持つのは難しいことである。また女性同士の間でも本当の自由・自律をお互いに得ていないのだ。女性のアイデンティティー確立に、他者をおとしめたり、（仮想）

敵を力で打ち負かすことなどは全く必要がないばかりか、それは解放とは反対の方向へ落ちていくことである。何よりも自分自身がどうしたいのかをきちんと考え、本気で自分をいとおしみ大切にしていけるなら、人とも連帯できるはずである。今緊急な課題は、女性同士が本当に分かり合えるようになることだと思う。

せっかく時間と場所を共有できる状況にある女性たちが、それぞれの個性・持ち味の違いをそのままに尊重し合うかたちで、なぜ出会えないのだろうか。力づけ合えないのだろうか。私がフェミニズム（横文字ではない適切な言葉がなくて、不便である）を語るなら、これは私自身の課題である。女性の苦しみを理解しないなら、それはフェミニズムとはいえないだろう。私たちは構造から心理的・社会的影響をうけているが、その構造をつくり変えることができるのも私たち自身なのである。おかしいことが起こっても「おかしい！」と言えないことにより問題が迷路に入っていくことを、私は今回の事件をめぐる学校全体の動きの経過の中で感じ続けてきた。片寄った情報に振り回される中で、集団は自浄力を失っていく。

今回私が、一番深刻なズレがあると感じたことは、差別を問う問い方の「方法論」のことである。これまでは、問題が起こった時に、問われる方は有無を言わ

さず正解（？）を強いられ、結論を迫られ、傷つけられてきたのではないだろうか。そこで味わった抑圧が、あらゆる差別問題への拒否感を無意識のうちに引き起こしてしまっている。時間をかけて理解することや、主体性を形成することを待たれることなく、唯一の（「正しい」）結論だけが要求された。そこには、向き合った者同士が解放を共に味わっていくという大切なプロセスと要素が抜け落ちていた。そこにあるのは、いわゆる「男性原理」の力と力のぶつかり合い、権力の奪い合いといった力関係の世界である。一方は厳しく責め、他方からは陰口でしか対抗できなかった。このような不信感と発想の貧しさから、私たちは解放されていかなければならない。フェミニズムは、これまでの権力に代わって自分たちが権力を持つとうとするような思想ではない。権力を持っていた者も、その抑圧を受けていた者も、共にその暴力から解放されていくことを目指すものである。この男性教師の場合も、その言動はひどいものであったが、差別という行動をしてしまったこと自体を、どこまでも責めるというのではなく、その指摘を受けた時点で、その人が自分の言動をどう受け止めて変わっていくのかが問われるべきなのである。内容ではゆずる気がないのに、形だけ謝罪文を書いて対処するということはあってはならな

い。

イエスにも限界があつたという聖書の記事がある。シリア・フェニキアの女性の訴えに対してイエスは、「イスラエルの失われた羊」（救いの優先順位）を持ち出して拒否をした。疲れた体を休めようとしていた時であつたとはいえ、ずい分冷たい保守的な態度を取っている。しかしその直後の、その異邦人女性の、存在から出る叫びの言葉によって、イエスはすぐに変えられた。イエスは、女性との出会いによって、自らの限界に気づかされ、それを乗り越えたのだ。目の前の者と向き合うことによって転換が起こつたのだ。この福音の豊かな内容をキリスト教は受け入れているはずなのに、相いも変わらず、女性はさまざまに排斥され続けている。イエスに向かつて再度訴えたこの勇気ある異邦人女性は、切り捨てられることがなかったばかりでなく、イエスの福音への深い参与をしたのである。

私がこれまでに会った、女性差別の問題に取り組む女性の多くは、「人間解放のビジョン」をはっきり持っている。そこで私たちは共に励まし合い、高め合ってきた。今も支え合っている。フェミニズムは「力の論理」を受け付けない。これまでの闘い方とは方法論が違う。目標は、人を責めることでも、立派な謝罪

文を書いてもらうことでもない。その人が真に変わる事ができた時、状況ははっきり変わっていく。それが希望であり目標でもある。そして、それはお互いの関係性の中で、共につくっていくものであり、時間のかかるものである。これまでの差別との闘い方は、非常に家父長的なものであつたために、差別の問題を提起する者は「暴力的な」方法論を取るに違いない！という先入観と怖れが、学生・教師の間に根強く刷り込まれていたのではないだろうか。謝罪文を書き慣れた教師は、いつペンを取ろうかと構えたのではないだろうか。

今回の排斥された女子学生は、この「暴力の伝統」の被害者であつた。問いを持つだけで、「危険な女」と見做されレッテルを貼られた。従来の固定観念の枠内で判断されて、否定・排斥された。彼女が授業の中で何を問いたかつたのか、今でもその問いは同じなのかと尋ねた人は一人もいなかった。本来一番大切であつたこと（多くの女性がキリスト教においても既に問い始めていること）がどこかへ吹き飛んで、「差別問題にどう対処するかという困惑」だけしか話題にならない。だから相変わらず、（いや、以前にも増して）「女性が問うのはみにくい自己主張である」という偏見や複雑な圧力によって、授業へのその女子学生の主

体的な関わりは妨げられ続けている。このことは、他の女性も縛られていくことへの、微妙な問題を含んでいる。また、これまでの伝統の中から生まれた不信が、女性への反感・敵意を醸成する一方で、「性差別の講座」が何事もなかったかのように開講されているのが現状である。その女子学生から見て、周囲の人々（学生・教師）が殆ど同じ顔付きに見えたのは、それぞれが家父長的方法論のルールに乗っかって思考停止をしていたためだろうか。

今回の出来事の一連のプロセスの中で、問題の本質を少数の人が見抜き、この女子学生を支えてくれた。それは大切な出会いだった。女性への迫害のひどさ、不当さを見て、女性差別の実態というものに彼らは気づいたのである。その女子学生は言われ放題であった。痛い苦しい思いをしなければ伝わらないものがあることを私は知った。そして無防備の中で逆に、周囲のひとり一人の立っている場がはっきりと透けて見えた。女性による暗黙の女性支配（父権制のピラミッドによく似た形のもの！）が女性ののびやかさを奪っている現状にも改めて気づかされた。

学校は、「性差別問題の講座」の準備段階で女性差別が起こった、という足下の問題を見つめる事なく、実際にそこで苦しんでいる女性を放置（実際としては、

相変わらず誹謗・中傷・排除が続けられている）した形で講座を開講している。これは、性差別の問題にも取り組んでいこうという意欲を持ったこの学校が、現在抱えている深刻な矛盾である。

脱差別の闘いは、権威や権力への抵抗を本質的に含む。女性が自分の直面している問題を明らかにする時、たとえば男性教師にとって気に入らないことが出てくるのは避けられないことである。このことが分からなくて、男性の気に触らない範囲でのみ女性の問題を考える講座が成り立つというのなら、それは見せかけだけの学びである。差別について学ぶ授業で冷静に知識を得ようとする範囲内で、果たして本当の「出会い」は生じるのか、という問いを忘れてはいけない。そしてそれらはひとり一人の問題なのである。（――傍観者は決して支援者ではなく、座視しているがゆえに加害者なのである）。

本当に差別をなくしていききたいと思うのなら、必要なのは単なる知識ではない。目の前の差別を「おかしい！」と見抜くことのできる感性と、勇気をどう養うのかということなのである。

風通しの良いフェミニズム

千葉悦子

十二月例会のおしらせに、例会のテーマとして“信仰（宗教）とフェミニズムは両立するのか”が書かれてあった時、当会らしいそのテーマに、どんな風に議論が発展するのかと大いに期待しました。当日のディスカッションは、残念ながらテーマから離れた所から回りし（参加された方はその辺の事情をよくご存じですが）、消化不良のまま帰途につきました。

今回、原稿依頼を受けたことで、そのテーマを契機に私の思いなどをつらつらと書き綴ってみようと思います。

“信仰（宗教）とフェミニズムは両立するのか”

そんな問いを寄せられた時、皆さんがまず思う事は、“宗教や宗派の組織の中でフェミニストである事の難しさ”でしょうか。それとも“フェミニスト達の中で宗教者である事の居心地の悪さ”でしょうか。もちろん“両立してます”と答える方もいらっしゃると思いますが。

自分史、語ってもいいですか。・・・思い起こせば十五の歳の事でした。私はキリストに出会い（うーん何と気恥ずかしいセリフ）十八で洗礼を受けました。修道院に入ることを真剣に考えていた大学生時代。それから十数年。幸か不幸か修道院には入らず、家庭を持ち子供も持ち、仕事も持っていた三十三の歳にフェミニズムと出会いました。信仰が私の土台にあって、フェミニズムというあかりが私の行く手を照らしてくれてるっていう感じ、かな。

で、私が何故当会に入ったかの理由でもあるのですが、宗教をしばし離れ、（私の場合、よく言われる様な―教会の男性中心主義のせい―ではなく、―告解―への年々つのる抵抗感からでした。それはともかく）フェミニストとして様々な活動に参加していると、そこに違和感を持つ事もあるのです。

例えば「中絶は女の権利」といった主張に。私はかつてあった優生保護法改正の動きやバチカンの方針にくみする者ではありませんが、それでも「産む、産まないは女の自由」という考えに対しては、違和感を覚えるのです。更に「マザーテレサにはだまされるな」とまで言う人達もいて・・・何十年も前からのマザーの多方面での地道な働きを少なからず知っている私に

は・・彼女は中絶を憂えるだけでなく育てられない赤ん坊を引き取る受け皿も用意している。そこが“国力が低下する”などといった中絶せざるをえない女性を糾弾するだけの人達とは違う、と私には思えるのですが・・。フェミニストは「中絶論議はいろいろな立場の人達の自由な論議にしたい」と言うけれど、そういう雰囲気があるでしょうか。少なくとも私には感じられません。(私は「産む産まないは女の自由」という考えはなじまないし、繰り返しますが、かといって何があっても産むべきだという考えは持っていません。このデリケートな問題に関しては私は私なりの結論を持っていきます。ま、それともかく)

こんな風に、フェミニストを任じる私もそのワクだけに収まりきれない、と感じる場面は多々あります。「フェミニズム・宗教・平和の会」とはきつと私のような心情を持つ人達の会に違いない、と勝手に解釈し、入会したのだけれど、本当はどうなのかしら。特に確かめた事はないけれど・・・。

ここで話題転換。

一昨年、私が北京会議で肌で感じて来たのは、「まず民族、宗教ありき」という事でした。“女性解放の名のもとに、民族や宗教の違いを越えて女たちが一同

に集う”そんなことはただの幻想で。イスラムの女性たちは欧米が非難的にするイスラムの伝統に誇りを持っていてのが感じられたし、東南アジアの女性たちもアジアにはアジアの風土にあったフェミニズムが必要だ、と主張していました。私がかじったフェミニズムは“欧米の”フェミニズムだった事を遅まきながら知らされました。だから欧米流フェミニズムが世界の女性達の方向性を示して一つに束ねる、なんていう事は幻想は幻想でもタチの悪い幻想だし、本当のフェミニズムとはそういったものではないのでしょうか。

今後、日本に借り物でない日本のフェミニズムが育ち、根付いていくならば、多様な考えを尊重するフェミニズムであってほしい。

昨年十一月、FGM(女性の性器切除)に反対する会の国際シンポジウムに出席しました。ところが、その会のあり方に異議をとねえる人々の会合が別の場所で開かれたという事を「フェミニズム・宗教の会」の例会の後、会員の方から伺いました。議論百出は良い事だと思うのです。判断の手がかりは多い方がいいから。主流のみを正統と認め、それ以外を異端として排除していくような男性原理は意識的に捨てなければ、と思います。

多様な考えが公開され、個々人がそれらを比較検討

— 1996年活動報告 —

- 3月 Womanspirit No.21発行
6.15 10周年シンポジウム
講師 李文子、大越愛子、川本隆史
6.15 会員名簿発行
9.27 例会 津田広志
「暴力・宗教・資本主義」
9月 Womanspirit No.22発行
12.8 例会 木内祐子、渡辺典子
「信仰（宗教）とフェミニズムは両立するのか」

できる様な自由な風が吹いてほしい。そんな“風通しの良い”フェミニズムが日本に根付くのを願ってやみません。それはやはり、私が信仰者でフェミニストという少数派だからでしょうね。

幼ママなんて大きらい（下）

岡村 聡子

六、幼稚園との闘い

卒園をあと二ヶ月にひかえた頃から息子のチックがひどくなった。やたらとせき払いをする。私は私で卒園まであと〇日とカウントダウンをしながら日をやりすごしていたが、それにしても息子の状態があまりにひどいのが気になっていた。卒園を間近にひかえたある日、私は担任に手紙を書いて息子の状態が尋常ではないことを訴えた。「このお手紙必ず先生に渡してね。」と息子に言って。が息子が帰宅すると手紙はカバンに入ってしまった。まず忘れ物はしない子である。私はこの時彼が担任をもちや味方と認識していない、彼の絶望の深さに愕然とした。翌日担任に電話し、幼稚園での様子を聞いてみた。すると朝の自由遊びの時に男の子がみんなしているサッカーにまざっていないという。毎朝登り棒にひとりで登っている。「何が見えるの?」と聞くと「みんなが遊んでいるのが見えるの。」「降りてきて一緒に遊ぼうよ。」「いいの。ボクここからカンシしてるの。」「そんなやりとりがあった

という。バカヤロー。どうしてもう一步介入しないんだよ。その程度の感性で幼稚園のセンセづらしてんのか！と口まで出かかったが、「あと数日なので母子共に無事に卒園したいと思いますので、先生もよくご覧になって気をつけて下さい。」と話したのが日曜の夜。翌月曜日、卒園まであと四日。朝息子が起きて来ない。寝起きのいい彼が、である。オカシイ。「もう支度しないと遅れるヨー。」と声をかけると布団の中から「ボク・・・幼稚園に行きたくないの。サッカーに入れてって言ったのに入れてくれないんだよ。だからボク登り棒に登って毎日見てんの。」という返事。そうか。ヨシ。あんなところ行くことないわ。休も休も。そして息子と赤ん坊を連れて遊びに出かけた。翌日の朝も起きて来ない。「幼稚園休んでもいいよ。」と言うと「ワイイ！」と言って布団からとび出して来る。今日はどこに遊びに行くか。

夜、幼稚園から電話がかかって来る。明日息子と話し合いたいのかかかってもいいかとの事。担任では話にならず新任の主任に今までのことを全てブチまける。幼稚園の指導とは一体何だったのか、もうこっちも切れまくっているからガンガンつつ込むのだがのれんに腕推しで私の怒りさえ受けとめられず、温厚なキリスト者ぶったもので「ハイハイお怒りはごもっ

ともです。」てな発言。だからね、だからキリスト教って大っきらいなのよ！てめーら、間違っても一匹の迷子の小羊の話を子どもの前でするなよ。もしおためごかしにそんな話したら首しめてやる！！と思った。

そしてとうとう卒園式の前日、担任が朝早くからわが家へやって来た。この日は息子と温泉に行つてリラックスして来る予定にしていたので、早く帰れ、今ごろ何言ったつておそいわ、アホ！と私は内心で思っていた。担任と一時間半ほど遊んだ頃に主任もお出まし。

「明日は来てね。ハイ握手！」ヘドが出そうだ。その後温泉に言つて母子共に気持ちよくなり、明日の卒園式だけは行こうね、と息子と話し合っていたところにまたあの主任より電話。この人、人の痛みがわからない。話している間に必ず私が激昂するような言葉を随所にちりばめる。「卒園式は出られた方がいいと思いますから。」（そんなことわかってら！卒園させればそれでチャラだと思つてんのか、事無かれ主義者め！）「息子さんもお友達に会いたいと思つていると思いませんから。」（ソレがイヤで登園拒否してんだろ、バカ！）もう最後はほとんど絶叫状態。せっかくリラックスして明日に備えようとしていたのがますます傷つくこのバラドックス。あんなヤツラ人間じゃネエ！だからキリスト者ぶったヤツラは大キライダー！と真底

思った。

七、そして入院

かくして何とか卒園式には出て、苦痛ばかりの謝恩会にも出席。息子はやはり落ち着かず必要以上に乱暴なもの言いが目立った。そんな様子に彼のやり切れないさがヒシヒシと伝わって来た。そして春休み。身も心もボロボロになった私は徐々に抑うつ的になっていった。息子は逆に元気になりチックもおさまっていった。

生きる力がわいて来ず家事もできず一日布団をかぶって泣いているのは今度は私の方となり、息子の新入学どころではなく、何もかも全て夫と周囲の人にまかせて入院という事態になったのだった（受診から入院までの数日間、本当に自分が自殺しそうで怖かった）。

入院先の主治医の先生は物腰のしなやかなオトコのにしては珍しいモノのよくわかった方だった。毎日丁寧なカウンセリングをほどこしていただいて私は回復に向かった（もちろん抗うつ剤も大量に投与された）。それでも私の体重はメキメキ減り、マイナス5kgになった。夫と同席のカウンセリングも二回行われた。夫はこの時になってようやく私の苦悩の深さにおぼろげながら気付いたようであった。（夫は極めてノーマルな男社会に疑念を抱かぬ男である）。

退院すると息子は既に小学生。元気に学校に通っていた。この時点でAさんBさんは別の私立の小学校へ。Cさんだけが同じ学校に残っていたが、幼稚園時代と違い顔を合わす機会はほとんど無かった。最も苦しい時期を私は多くの人の助けを借りて何とか乗り切ることができたのだった。

八、専業主婦Ⅱ「よい母親」という神話

「よい母親」とは何か？それは子どもを囲い込み自らの価値観で（或いは「世の常識」という名のもとに）子どもをがんじがらめにする母親のことであると私は思われる。私自身この呪縛にからめとられていたからこそ、子どもによりよい幼児教育を与えねばならないと強迫的に信じ込み、第二子までQ幼稚園を選んだのであった。しかしそこには奇怪な人間関係がうずまいていた。強烈な横並び意識。そこから少しでもはみ出そうものなら「女の子なのに自己主張が強い。」「乱暴な男の子。」「のレッテルが有形無形に（幼稚園の先生の指導も相俟って）貼られ、親は必死に子どもを矯正しようと試みる。子どもは当然息苦しい。何故あるがままの姿を受け容れられないのか。それは現在の学校教育が硬直化しあるがままの子どもを受け容れることができなくなっているのとパラレルである。こんな

に小さいうちから子どもは「お受験」に向かわされ、あるがままの自分を受け容れられずに育つのだ。

今の母親は多くが高学歴であり、仕事もそれなりにやってきた人が多い。その人達が何故ひと度子を産み母になると子どもの教育に全てを捧げる「良い母」になってしまうのか。私は自分も含めて幼ママ達の精神的な幼さに気付かざるを得なかった。未分化な横並び意識の元に成長し、その他の価値基準を全く内面化しないまま大人になり、子が産まれたということでも母になってしまう。そしてひと度主婦になると子どもの出来不出来、問題のあるなしが母としての自らの存在価値と信じ込んでしまう構造となっているのだ。

九、幼ママ版「いじめの構造」

芹沢俊介氏は対談集『いじめ時代の子どもたちへ』の中で「いじめ」を次のように定義している。①複数の多数者が特定の個人（少数者）を責めるという集団的行為であること。②反復継続性つまりいじめはプロセスと併せて暴力の多様性をもつこと（つまりいやがらせ、無視などの精神的暴力も当然含まれる）③いじめられる・いじめる関係は一方的に補完的であること。（つまりいじめる側はいじめられる側をのがれさせない）これにてらしてみると私は①の複数の数人（と

多くの傍観者。）に②一年半の長期にわたって反復継続して有形無形の精神的な暴力を受け続け③こちらはもう無関係になったつもりになっていた頃に「あの人ったらすれ違っても挨拶もしないのよ。」と言われ、一方的に取り込まれ続けていた。これは幼ママ版いじめの構造そのものである。ことさら苦しかったのは私がひとりではなく息子が共にいたことであり、いじめが彼にまで及んでいったことであつた。彼には全く何の落ち度もない。私ひとりだけのことであれば徹底抗戦することも相手を殴り倒すこともできたであろう。

（実際、年長最後のクラス懇談会の折りにBさんCさんが同席する中、一年半にわたって母子共に仲間はずれにされて苦しかったことをクラス全員の母親と担任の前でぶちまけた）でもそれでは更に息子が苦況に立つのではないかという思いから怒りや悲しみを内向させざるを得なかった。一番よく事態を見ていた存在、それは子ども達であろう。明るく活発、何のうれいもなかった息子が遂に登園拒否に至る。その背後にはママ達の関係の変化を敏感に感じ取りすこしずつすこしずつ息子と友達の輪の外へ排除していった幼ママの子どもの存在がある。子ども達はそれぞれのママを見ながら「いじめ」ってこうやってするものなんだなということを学んだことであろう。就学前からいじめは

始まっているのだ。

十、フェミニズムから見た現代の主婦問題

学歴もキャリアも実力もある若い女性がさしたる理由もないまま(或いは個々の理由の故に)仕事をやめ、専業主婦になってしまふのは何故か。私はここに日本においてまだまだフェミニズムが女性にとって血肉となっていない実情を見ざるを得ない。私自身が働いていた頃(均等法のできる以前のことである)肩ひじ張って男並みに働かねば、いや男以上に働かねばならないと思っていた。実際嫁をもらいたい程の忙しさで家に帰るとグツタリしてしまい、家事は全て母まかせであつた(既に父がなくなっていたので私がはたらくぞ!という強い意志もあつた)。が、男並みに働くことにどこかで無理も感じていた。このような働き方はどこか人間的でない、自分がどんどんすり減っていくという自覚もあり、疲労も重なっていた。そんな時夫に出会った。このまますり減って何らかの精神的な依存症を悪化させながら遂にはバーンアウトしてしまいそうな自分からの脱出口として「ケツコン」と「子育て」は実に魅力的な解決策に見えたのだった。あの時後先考えずケツコンにふみ切らなければ私には孤独と自己崩壊が待っていたような気がする。あの時仕事を

辞めてケツコンし専業主婦になってしまったこと、これは当時の私には致し方のないギリギリの選択だった。が結婚して十年たった今私は思う。やはり私は私なのだ。ケツコンしたって子を何人産んだって私は私。この息づまるような日本社会の横並び意識に適応できるようになかなかな私ではやはりなかったのだ。

出る杭は打たれるという。私は出た杭だった。そしてしたたかに打たれたのだ。あと私に残された道はただひとつ。孤独に耐えながら出すぎた杭になってしまふこと、そして出すぎた杭の女達とのネットワークをつくりながらこの日本社会に徹底して異議申し立てをしていくこと、これしかない。

十一、さいごに

心の傷の回復には思った以上に時間がかかる。なかなかやる気が出て来ない。体重はやっと1kg戻っただけでまだ元の体力にはほど遠い。

が、明るい話題もある。末子の女の子を無認可の保育園に入園させたことだ。疾病理由で公立保育園の申請をしたが満員ということで×。わらをもつかむ気持ちで電話帳を繰り、たまたま定員に空きがあった小さな現在の保育園(定員十五人)に入園させてもらったのだ。保育園のママは皆忙しいから幼ママのようにた

むろしておしゃべりなんて一切ない。また幼稚園とちがつて子どもをまるごと受け入れてくれる園の姿勢があった。子どもたちの小さなトラブルは笑って見すごしてくれる（Q 幼稚園ではお友達にぶたれたら「やめてね」といいましょう、という指導だったが保育園では本人達が気がすむまでバトルをさせてくれる。」何よりもヘンテコリンにキョーイクしてくれないのが大変気に入っている。これぞキョーイクの原点じゃないか？！保育園に末子を通わせながら私の心はすこしずつ癒されている。

私はもう二度と幼ママにはならない。末子はずっと保育園。保育園から小学校に入學してもらおう。私は私のやりたいことをする。これが健全な親子関係でなくて何であろう。

さようなら幼ママⅡ「よい母」よ。私は母ではあるが「私」を生きた。それを子どもが将来どう評価するかは彼らの問題だ。私はこの一連の苦い経験を通して私がいかに生きるべきかを腹の底から学んだ。結論はただひとつ、私は私を生きたのだ。

「日本万歳」史観を問うトーク集会

黙っているわけにはいかない

岩田澄江

緊急トーク集会「日本万歳！」主義を問う——は、こんなことをほっておいてはならないという、止むに止まれぬ思いから始まった。「自由主義史観」と自分たちのことを呼んでいる人々は、どう他人のことを考えるのも「自由」であるためか、こともあろうに「自虐史観」というひどい名前を「私たち」につけてくださった。「私たち」と感じてしまった以上、私たちは何か言わずにはすまされないと思ったのだった。他にもこのことを「私たち」のこと、と感じている人々が、これからもずっと黙ってはいないだろう。そう期待している。

戦後五十余年、もともと日本が得意としてきた経済の分野でも陰りが見えはじめて、私たちは過去に積み重ねてきたものが一体何だったのか、振り返らないわけにはいかない。大学の理科系の優秀な学生がしたことが、オウム事件だったとすると、人文系の教授らが

騒いでいるのが、この歴史観問題だ。この事件は多くの中・高校の教師をすでに巻き込み、出版やTVといったマスコミを大々的に利用して大宣伝を行っている。至ってつまらない映画や書物でも、宣伝によって大いに売りまくってしまうのが今日の常であるから、私たちは決して安心してはいへない。

徹夜テレビで見る「自由主義」論者たちは、従軍「慰安婦」問題をただの一点、奴隷狩り的な強制連行はなかった、あったというなら証拠の文書を見せろ、という風に勝手に改ざんして相手に迫っている。その人たちは「学者」である筈の人もいるのに、この問題の真実に迫ろうという学問的情熱もなければ、気の毒な人に対する普通の人間としての感情も無いように見える。そこに見えるのは、己れの主義主張に事実の方を合わせてしまおうとする強引な意図だけだ。

ついこの間フェミニズムが台頭するまで、告白すれば私も従軍「慰安婦」のような女性の問題は、すべて戦争だったのだから仕方がなかったのだ、ということと諦めねばならないことと情けなくも諦めていた。何もこの問題だけではない。女性のことはほとんど全て、おんななんだから仕方がない、と諦めるように教育されてきたのだ。このマインド・コントロールがやっと解けたばかりだというのに、又もやこのような男性た

ちの詭弁に騙されるわけには絶対にいかない。フェミニズム運動が生まれなかったら、「慰安婦」だった人々は決して口を開くことはできなかったと思う。彼女たちが必死の思いで語っても、権力も何もまたないがゆえにアジア女性を貶め、彼女たちの証言には何の重みもないと言って平然としている人々を、私たちは許しておくわけにはいかない。

だが、味方は女性ばかりではなく、男性の中にもいる。今回の集会で発言した男性たちはそういう人々だった。歴史が少しづつでも前進していることを信じるために、私たちは過去の亡霊のような存在に対して、一歩も引かぬことを宣言しなければならない。

(二月十日)

戦後史を否定する「日本帰帰」現象

奥田 暁子

二月七日、フェミニズム・宗教・平和の会とキリスト教アジア資料センターが共催して、「『日本万歳』史観を問う」集会を行った。大して宣伝もなかった

のに一八〇名を超える参加者があったのは、発言者（鈴木裕子、松井やより、富山妙子他）の吸引力もさることながら、多くの人が今起こっている「日本回帰」現象に危機感を募らせているからだと思う。

テレビでも新聞でも大きく報道されているので、すでにご存知だと思うが、藤岡信勝、秦郁彦、西尾幹二、小林よしのり氏などが「自由主義」史観を主張して、「新しい歴史教科書をつくる会」を結成したのは昨年一二月であった。賛同者には会田雄次、飯田経夫、大宅映子、加地伸行、木村治美、林真理子などの言論人や大企業のトップがおおぜい名を連ねている。

彼らが主張しているのは、これまでの中学・高校の歴史教科書は「自虐史観」に立っていて、自国の悪いところしか教えないから、もっと日本人としての誇りをもたせる歴史教育をしなければいけないということである。そして、「従軍慰安婦」問題もアジアへの侵略戦争も教科書から削除すべきだと要求している。

中村政則（日本近現代史）によれば、今回の動きは明治以来四回目の「日本回帰」現象である（『毎日新聞』一九九七・二・四）。ちなみに、一回目は文明開化と啓蒙運動への反動として明治二、三〇年代に起こった。二回目は大正デモクラシーへの反動として起こった一九三〇年代の国家主義的風潮。三回目が一九五

〇、一九六〇年代の日本文化再評価論（桑原武夫、竹山道雄など）や「大東亜戦争肯定論」（林房雄など）。今回の現象は、中村氏によれば石原慎太郎が『N〇』と言える日本』を書いた一九八〇年代から始まっている。

そういう意味ではいざれ今回の動きも終息するのだから取り立てて騒ぎたてなくともよいという見方もあるが、わたしは今回の「日本回帰」現象が戦後五〇年もたつてから（ということとは、過去三回の時と違って、民主主義体制が根付いたと思われる時代になって）でしてきたことを考えると、やはり放っておくわけにはいかないと思う。敗戦後心ある人びとによって歴史の真実を明らかにする努力がなされ、過去に犯した間違いは間違いとして直視しなければならぬことにやっと多くの人が気づきはじめた時になって、それらを全否定するということは、五〇年の歴史を抹殺するということだ。

二月七日の集会では今日と一九三〇年代との状況が類似していることが何人かの人から語られたが、おそらく類似性が最も強いのはマス・メディアの分野ではないだろうか。言論の自由を振りかざして『産経』『読売』『諸君』『正論』などがあのように大々的なキャンペーンをやっているにもかかわらず、それを批判する動きはマス・メディアのなかには見られない。

テレビがとうの昔に社会派番組から撤退してしまつた以上、今、いちばん頑張らないといけないのは新聞だと思ふのだが、リベラル派を自認していたはずの『朝日』も『毎日』も「中立」という曖昧な態度に終始している。

現実がそうである以上、私たちはだれかに期待しても始まらない。これまでほとんど政治的な発言をしてこなかったフェミニズム・宗教・平和の会が今回の集会を企画したことに違和感を持たれた会員の方もあると思ふが、黙っていることは彼らの主張を消極的にであれ認めることにつながるのではないだろうか。マス・メディアにも政党にも期待できない現在、市民たちがあちこちで小さな声でも上げていくしかないように思ふ。

「憂慮する朝鮮人のアピール」を出した徐京植（ソ・キョンシク）さんは、「つくる会」の主張には目新しいことは何もないし、学問的にも根拠のない枝葉末節の揚げ足取りでしかないことはわかつているが、「もはや黙っているべきでない」と感じたのは、彼らの主張する国家主義、自民族中心主義のレトリックを多くの日本人、とくに若者たちが簡単に受け入れようとしていることに非常に危機感を抱いたからだという。私たちはこのような恐怖とも呼べるような危機感を、

在日朝鮮人だけでなく、日本に住む多くの外国人が共有していることに気づかなければならない。

集会のとき徐さんが言った「内省」という言葉が印象に残っている。内省しない相手とのたたかいでは、内省において凌駕することが大切だというのである。私たちも「つくる会」のイデオロギーを批判するだけでなく、なぜこのような状況を現出させたのか、また、それを乗り越えるためにどうすればいいのかを、自分たちの問題として内省する必要があるだろう。

（二月九日記）

私たちが今向き合う相手は？

小澤 治 慧

奥田さんがウーマンスピリット二十二号に次のように書いている。

「たとえば一部の政治家や一部の市民の「従軍慰安婦」問題に対する発言にみられるような、未だに時代錯誤の非常識な言説がまかり通っている現実をきちんと批判することも重要である。そのために、私たち

はもっともつと思いを鍛える必要があるだろう。

この二十二号が私たちの手に渡った昨年九月からの半年間で事態は急転回し、最近では私たちが“一部の非常識な人々”の言説とみなしていたものが、大手を振って歩き始めた感がする。

二月一日付け産経新聞は、一面に大きく「新しい教科書を作る会」への入会を呼びかける記事を掲載した。二月に入ってから投書欄をみていくと、「日本人としての誇りを持つ」とか「祖父に誓おう、誇り高き国に」といったタイトルをつけたものを次々に載せている。また、投書欄の上の部分を使い、七ヶ月以上も前から毎日、「教科書が教えない歴史」という“自由主義史観研究会”会員の書く記事のコーナーが陣取っているのである。更に、今年からは、“母と子に贈る「日本の神話教室」”なるものの連載も始められた。

正に、全紙面を挙げて“戦後民主主義への批判と日本の伝統的規範への再評価（産経の方針）”を画策し、そのために様々な分野の学者、文化人といったオピニオン・リーダーたちが動員されているのである。

日頃、朝日新聞しか目にしない私にとって厚顔無恥ともいふべき、なりふり構わぬ産経の右翼的論調の紙面構成は驚きに価する。

しかしこうしたマスコミ界の一連の動きはその流れ

に与する者たちを巻き込み、勢いを増しているような気がする。彼らの作り出す報道をみる度に、ジャーナリストの基本姿勢に必須とされる批判精神をどのよう

に考えているのか、問い詰めたい気がする。

反「慰安婦」キャンペーンを主導する人物たちのあまりにもお粗末な論理を見抜けないで、（あるいはわかった上でもかもしれないが）担ぎ上げているのはマスコミ界ばかりではない。もっと直接的には、子どもたちの教育に携わる現場教師に対しても、彼らの“日本万歳史観”の考えが着々と浸透しつつあるという憂慮すべき事態も報告されてる。

私は何年か、塾という比較的自由な教え方が許される場で、中学校の社会科（公民・歴史分野）を手がけたことがある。その経験から言えることだが、教育現場に於て、教師が抱く歴史認識は、子どもたちにとって等閑視できない重さを持つということである。

そうしたことを考えると、彼らの唱える“日本万歳史観”の現場教師への刷り込みは何としても阻止しなくてはならない。

マスコミにより撒き散らされる“日本万歳史観”の横行を許さないために、私たち一人ひとりに何ができるのかを考えてみたい。

まず第一に、彼らの立脚点を照らし出し、その拠っ

て立つ歴史観が、歴史的事実を踏みにじる、男性中心、自国民中心（女性蔑視、他民族差別）に根付くマイノリティの痛みを否定してゆく「皇国史観」であることを認識する必要がある。

第二に時代錯誤ともいえるべき彼らの攻勢がじわじわと水のしみ込むように人々の心に届いてゆくのは何故なのかを問う必要がある。

この問いを前にして私たちの置かれている現在の状況をみてみたい。フェミニズムが運動としてどれだけ根付いて来ているのかという観点から見た場合少し寒々しい光景が拓がっている。一方に女性史のめざましい成果や覚醒した女性の確実な増加という現実がありながら、まだまだ日本的土壌はフェミニズムによって耕されてはいないのでなかろうか。

そんなところへ草の根ファシズムが芽を出すと、伸び始めたばかりのフェミニズムの若木が苦戦を強いられないとも限らない。

例えば、私の周囲にこんな話がある。

阪神大震災後、防災組織が作られているのだが、緊急時に備え、各人の寝ている場所を詳細に書いた図面を作成する地区が出てきたのである。各個人のプライバシーに踏み込む形で防災活動が進められていくことに驚いた私は、「そんなことをして文句は出ないの」

と聞いてみた。ところが、その話をしてくれた知人は不思議そうな顔をして「そんな人はいない」という。彼女は、何年も町議を勤め生協活動にも熱心な活動的女性である。保守的な町役場のお歴々に向かい、議会では堂々と反対意見を述べる革新的（？）女性でもある。保守的な婦人会幹部ならいざ知らず、意識の高い（？）と思われる一人の女性が、現代版五人組制度ともいえるべき動きに何の疑念も抱かず乗ってしまい、というよりその先頭に立っている姿に、ある象徴的な風景を感じてしまうのである。

私たちが深く根ざす日本の精神風土は、一旦逆風が吹き始めるや、たちまち私たちの足元をすくうことになるに違いない。

その逆流に棹さして、足ふんばって歩んでゆこうとするには、戦後五十年、私たちが看過してきた“見えない天皇制”とでもいえるべきものを再認識する必要があるだろう。おそらくその作業過程で、フェミニズムが日本の風土へ根付くことを妨げているものの姿も見えてくるのではないか。

記号化する言葉と人心操作

鶴岡 瑛

自分を取り巻く世の中に対して、なにか気味悪いなあという違和感が強まったのは、昭和天皇が亡くなった頃だろうか、美空ひばりが亡くなった後のことだったか。あの頃へ自分中心の思いこみによるへいい気な一人よがり〱が世の中に蔓延していた。

詳しい病状は発表されないのに、各種の報道がやたら多かった。そうしたことは人の心に緊張を掻き立てるものなのか。へおいたわしい。お気の毒に〱という一見素直で人間的な反応は高齢者に多かったようだが、その気持ち〱が戦争責任がどうこうなんてとんでもないことだ〱と短絡してゆくと、もう私にはついていけない。その人たちがそのあの戦争の渦中で翻弄された世代であり、戦争によって心身に癒えぬ傷を負い、老いて社会の片隅に追いやられている人々とも同年代のはずである。自分が見たいもの以外は目にも入らず、存在しないも同然となる。「相も変わらぬ日本人だなあ」という想いが強まった。

あの頃から、他人が気になって仕方なく、世の中の

主流に乗り遅れまいとする日本人の性癖が、マスメディアに先導される形でぐつと昂かまった感がある。

へ早くお元氣になれるように〱と皇居に記帳に来る人がテレビで報じられれば、ワツと大勢が押し掛ける。そこに手際よく用意される記帳台。亡くなればさっそくに壮大なセレモニー。世を挙げてへ昭和は終わった。一つの時代が終わった〱との感傷的な大合唱。またもや持ちだされる記帳台の前の従順に列を作る人々。そこで書き込まれる名に何の意味があるのか。

生前痛ましい孤独地獄に陥っていたらしいひばりと、「ひばりちゃんに生きてゆく力をもらいました」と、やたら明るくひばりとの一体感を強調するファンたちとの落差。

天皇という、かつてはへ現人神〱であり、今でも天地ほどの懸隔のある存在と自分、ひばりという希有な才能を持つ歌姫と自分、との間にある距離を簡単に無視して、自分に都合のいいイメージを作り上げ、一方的にその虚像に執着し、熱狂する。こうした一方的な共感―思い込みはなぜ成立するのだろうか。自分と対象のどちらをも客観的に見ていないからこそ、可能なことではなからうか。

時代はそろそろバブル景気が陰って、社会全体が限らない経済成長の夢から醒まされ、次なる神を見いだ

せないでいた頃のこと。からっぱな自分を自覚するのが怖くて、いつも何かに酔っていたい。大きなものと一体化することで、自分を意味づけ、充足したいという欲求が昂かまっていたのではなからうか。以後こうした傾向はいっそう強まっていくが。

そうした欲望の極致を私たちは、戦前戦中にいやというほど経験したはずだったし、陶酔と醒めた後の幻滅を身を以て知ったはずだった。へ神の子孫である天皇の下に自己を没入し、へ神国日本へに一体化し、へハ絃一字なる理念に熱狂し、東亜の盟主たらんと狂奔した。中心となるシンボルやスローガンは単純であり、時代錯誤の古色蒼然たる道具立てを持つ方が、人間の心の単純―野蛮な部分に訴える力があるのかもしれない。そうした現実感のない道具立ては、心酔していた者が正気にかえった時、なぜあんなことを信じていたかを自分でも不思議に思い、あれは夢なのだ、自分も欺かれていたのだ、周囲の事情がそう仕向けたのだと、自分に向かつて弁明するためにも効果的なものであるらしい。夢の中ででき事なら、醒めてから責任を取ることも、反省する必要もない道理である。

どうやら今また、きな臭い道に私たちを連れ込もうとする勢力があるらしい。かつては国家が、教育機関が、軍隊が、社会全体が、つまりあらゆる権力がこぞ

って、国民がこうしたキーワードに条件反射するように仕向け、疑念を持つ者を徹底的に弾圧した。今の彼らは昔のように国家を挙げての力は持たない。そのかわりに彼らはナチスがしたように、社会や人間性の暗い病んだ部分に、卑劣な攻撃を仕掛けてくる。空虚な美辞麗句によって優越感をくすぐり、その陰に恨みや被害意識を増幅する。

徐京植氏は『週間金曜日』に「彼らの関心事は初めから、枝葉末節の揚げ足取りをすることによって歪んだ自己愛を満足させることであり、つまるところ日本国家と癒着した自己を何が何でも肯定することではない」と、端的に書いておられるが賛成である。また「本質において、彼らは他者を蔑視しており、対話を拒否しているのである。」という推測も正鵠をえていると思われる。

彼らは初めから論理や対話は拒否している。彼らの武器はもっぱら感情であり、この社会に蓄えられている、暗い不健康な情念に訴えかけて同調者をつのろうとする。戦前の皇国史観教育に骨がらみにされている世代や、非情な経済社会からはじき出され、冷遇されていると感じている人々。性を売り買いする社会に同調してきたくせに、昔のような家族制度が無くなったから世の中の風儀が乱れてきた、と考える人々など、

社会や自分の先行きに不満・不安を感じている人々が、こうした訴えに取り込まれやすいだろう。

しかしもつとも心配なのが、危機にさらされた家庭や学校を通して、この管理社会の重圧をもろに受けている青少年である。マルバツ式、二者択一の単純思考に慣れた彼らはじっくり考えることが苦手であるし、勉強ばかり強いられて人間関係に慣れる機会が少ないから、他者の感情を忖度する能力も希薄である。人間に関する理解や想像力が欠如しているせいと思われるが、言葉や文章から意味を汲み取る能力に欠ける。その結果言葉が豊かな内実を失ってやせ、記号化していくように思われる。記号化した言葉と短絡的な反応様式は、容易に反応が予測でき、操縦が簡単な点、悪い組み合わせではないだろうか。そして彼らの社会・大人に対する不信の深さも問題だろう。以上はそのままオームの集団が、なぜあんなに大それた行為に突っ走ってしまったか、という問題の解答とも成りうると思う。

今、私たちの社会は非常に危うい状況にあつて、その解決策は彼らの主張するのとまさに反対の、社会の不正、不正を減らし、緊張を和らげる方法にあると思われる。

(紙数が無くなったので) 本来の主題に駆け足で戻

れば、この〈従軍慰安婦〉の問題は非常に微妙な問題を含んでいるので難しい。しかし〈強制連行〉を狭い意味に限定したり、紙に書かれた記録という形の証拠がなければ認められないという立場は、頂上に天皇を戴き、天皇に仕える官公吏(もちろん警察、軍隊も含み)が、一般臣民を監視するような形で戦時体制を敷いていた、当時の息苦しい社会体制を無視していてずるいと感じる。

紙に書かれた命令書が無かったって、軍人や警官、学校の先生や地域の小ボスである有力者は、互いに手を結び合って戦争遂行に協力しあっていたではないか。内地であつても、少年兵募集に教師が協力したり、金物供出などどれだけ実効があるかしないことに、男のヒステリイと表現したいほど献身した官吏などがいた時代です。まして植民地にあつて戦争末期、教師がお国のためにぜひ挺身隊(すべてが慰安婦にされたわけではないし、教師がどこまで本当のことを知っているか)に多少の疑問は残るが)に応募しなさいと薦め、先生が言うのだから間違いないと信じて従った教え子が、慰安所を経営する業者の手に落ち、死ぬか、運命に甘んじるかの道しなくて、やむなく後者を選んだ時、それは強制ではなくて自発的に選んだ(商行為)だと言いうるものでしょうか。またそうして集められ

た少女の集団が連れて行かれる途中に、各地で警官や軍人の警護（！！）が付いたり、優先的に輸送船に乗船させたりということがあったら、被害者から見ても、事実においても、それは日本という国の名においてなされたことに間違いありません。

慰安婦と呼ばれた人たちの中に日本人がいたからと言って、何の免罪にもなりません。実際商行為としてそういう道を選んだ人も、国籍を問わず存在したかもしれない。しかし上記のようにして慰安婦にされた人があったことは、実行した日本人の証言からも明らか以上に、強制的に、あるいは欺かれて慰安婦にされたと名乗り出た人の言葉を疑うことは、重ねてその人を辱めることです。人間としてしてはならないことです。ましてや戦場に置き去られて命を失い、訴えることの出来ない人も多いのですから。

また貧に迫られてへ商行為の道を選んだ人に対しても、彼らの国を植民地化し、土地も奪い、経済的な利潤を吸い上げ、さまざまな圧迫を加えた事実がある以上、日本国に責任がないとは言えないと思うのです。

私も、根っからの日本人として、国としての正式な謝罪、補償に反対する人々の主張の幾分かを共有していることを認めざるをえません。たとえば私も彼らと同様に、日本が過去に犯した罪悪の大きさを承知して

いるから、もしこの問題で無条件に補償要求に応じたら、次には様々な国で様々な事柄に関して、莫大な補償の請求が出されるであろうことへの恐怖感を持っています。

では私は彼らに同調するのか。それはやはりできない。私たちの人間性に関わることだから。私たちがいい気な一人よがり、他国を侵略し、植民地化し、人間を踏みにじったのは事実だから。そういう時代だったからとか、よその国だって同じようなことをしているんじゃないかと、弁解したくなるのは人情だが、被害者の前では通用しまい。一たびそういうことをしたらどうなるのか、苦い教訓を受け入れ肝に銘じるのが、結局私たちのためだと思う。二度と同じ過ちを繰り返さぬためにも。

会計報告

(1996. 1. 1～12. 31)

《収入》		《支出》	
繰越	261,302	印刷費	170,000
会費	222,000	送料	68,324
冊子売上	17,670	講師謝礼	90,000
集会参加費	34,780	文具・コピー代	3,513
		会場費	7,700
合計	535,752	合計	339,537

現在高 196,215

編集後記

昨年一二月の例会のテーマは「宗教（信仰）とフェミニズムは両立するのか」でした。当日参加できないがぜひ内容を知りたいという声が何人かの方から寄せられましたので、本号ではそれを再現することにしました。当日の発題者の一人である渡辺さんの原稿は、やむを得ない事情があつて、今回載せられなかったのは残念ですが、それぞれの方が自分の内面にまで深く踏み込んで書いてくださいました。力作が揃ったと思います。

本号で紹介した「新しい教科書をつくる会」の動きはますます活発になっており、全国的なキャンペーンを展開しています。東京都議会でも自民党議員が中心になって教科書から「慰安婦」の記述の削除を求める動きがあるようです。

池田さんが触れておられる「女性・戦争・人権」学会について詳細をお知りになりたい方は私まで問い合わせてください。

振込用紙を同封しますので、一九九七年会費をよろしく願います。

（奥田 暁子）

Womanspirit No.23

一九九七年三月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180 武蔵野市関前五―五―二五

奥田方

T/F 〇四二二(五三) 八七四六

郵便振替 〇〇―七〇―九―八〇三一

定価 七〇〇円

印刷 (株)オクノプリント社